サー・エドワード・グラストンの肖像～大英帝国魔術奇譚～

山本倫敦

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

１９世紀末、イギリス。雇い主の元をクビとなった下僕、アンソニー・ハドソンは、絶望のさなか旧友の紹介で、その祖父の勤める屋敷での職をもらう。しかし、その新しい職とは、下僕である彼とは天と地ほどの差がある「従者」。困惑する彼の雇い主であるサー・エドワード・グラストンも「普通」ではない貴族で…

小説家になろう様にも投稿しております。

なろう版ＵＲＬ→ ｈｔｔｐｓ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ２２２７ｇｂ／

目次

Prologue …… 1
Darkest time ① …… 3
Darkest time ② …… 5
Darkest time ③ …… 7
Dreamer ① …… 10
Dreamer ② …… 12
Dreamer ③ …… 14
Welcome to "The House" ① …… 17
Welcome to "The House" ② …… 19

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ

夢を見た。

森の中をお父様が走っている。何かから逃げているのだろうか。後ろから追ってくるものはかすんでしまって見えていない。何から逃げているのだろう。だけれども、悲しいことに、追ってくる「もの」とお父様との間の距離をどんどん縮まっていく。そして、最後に聞いたのは、お父様の断末魔の悲鳴だった。

目が、覚めた。

とうとうあの日から一年が経った。お父様の手紙が絶ったあの日から。

思えば、早いようで遅かった。音信不通になって最初の二、三カ月こそはお屋敷は安定しなかったが、ステイプルトンの素晴らしい裁量のおかげで、きちんと回り始め、気づいたらお父様のいないことが日常になり始めた。月日の感覚が麻痺してたのだろうなと思う。

そんなことを思いながら、真っ白な霧に包まれた夜遅いウエストエンドの一角を歩く。人のいない歓楽街は不気味なように静かで、少々怖くもあった。

歩いているうちに私は歩を止めた。繁華街よりちょっとそれた、普通の建物。これが今日の私の目的地だ。私は深呼吸をして、扉を開けた。

開けると煙草や葉巻の匂いが私を洗礼する。もう全員集合しているみたいだ。そんな確信を得て、私は階段を上った。二回に上がったところにあるドアを開けた。円卓の周りに座ったいかつい紳士たち。いかつい顔をしているのも、まあ当然であった。私は動揺を隠して、できるだけ無機質に、事実だけ、伝えた。

「父、ヘンリー・ガブリエル・グラストン第六代ランズワース伯爵からの最後の手紙の差出の日付から、一年が経ちました。」

その「事実」を受け止めるために、少しは時間を要したのだろう。紳士たちは五秒ほど黙りこくっていた。
「それが」
空席であるお父様の席の向かい側に座っていた立派な髭をたくわえた老紳士、サー・アルフレッドが口を開いた。
「それが、我々にとってどのような意味を持つかは、ここにいる諸君はもう察しがついているはずだ。」
また沈黙が空間を支配する。サー・アルフレッドは周りを見渡し、言った。
「これが普通の貴族の慣習ならば、遠縁だろうがなんだろうが男子を後継ぎとして引っ張ってきて、次期当主とするのが定石だが、我々は、少なくとも普通の貴族ではない。」
私はごくりと唾を飲み込んだ。
「我々『魔術師』は、性別でもなく『横』のつながりでもなく、ただ単に『縦』のつながりと、実力を重視する。それが我々の行動理論であり常識。それは、ここにいる皆も、異論はなかろう。」
皆、うなずく。そして、サー・アルフレッドは一枚の紙きれを取り出した。サー・アルフレッドは深呼吸し、威厳ある声で読み始めた。自分も心のどこかで予想していた、台詞だった。
「汝、エドナ・ミカエラ・グラストンに告ぐ。」
そんな風に、始まった。
「この度、第六代ランズワース伯が失踪し、生死不明となってから一年経った。よって我々『クラブ』は、此度の非常事態に際し、汝を第7代ランズワース伯と承認する。」
私は息を飲んで、それを聞いていた。

Ｄａｒｋｅｓｔ　ｔｉｍｅ　①

１．Ｄａｒｋｅｓｔ　ｔｉｍｅ

突然の話だった。と言うしか心の整理をつけることができない。しかし、前もって心の準備はしておくべきであったのだろう。勤めて勤めて一年しか経っていないのに僕は職場をクビとなってしまった。それも、主人の浪費癖が原因で起こった財政難による人員削減というつまらない理由で。屋敷にいた時には口が裂けても言えなかったが、そのころでも今でも、その主人をクソ野郎と思い続けている。浪費して金がなくなるのは自業自得なのにしわ寄せを受けるのは僕たち下僕のような使用人というのはあまりにも解せない。おかげでこっちは落ち着くまでロンドンにいる伯母の家に下宿して迷惑をかけなければならなくなった。ただ、素晴らしい紹介状を書いたということらしいので、今僕の怒りは頂点にはまだ達してはいない。

僕の乗った列車はほぼ定刻でセント・パンクラス駅に滑り込んだ。外に出ると、聞きしに勝る煙たさが僕を襲った。伯母はこんな環境で住んでいるのかと思うと、ちょっと不憫に思えてきた。

メアリルボーン通りをそのままずっと行って、少ししたら曲がって、ベーカー街に入ってちょっと進んだ。すると、去年仕事が決まったことを報告しに訪れた伯母の家があった。伯母の家を訪ねるのはあの時以来だ。そう考えると、恥ずかしすぎてノックもできない。しかし、叔母に会わないことにはこれからの生活は始まらない。僕は深呼吸をして、叔母の家のドアを叩いた。

ノックして数秒後に見慣れた懐かしい人が出てきた。伯母だ。

「あらまあ。」

相当驚いたような様子だった。

「久しぶりねえ。ちょっとびっくりしちゃったわ。」

「手紙もよこさずに急に来てごめん、ジェーン伯母さん。」

「とりあえずまあ、入って入って。」

伯母は中へ案内してくれた。家の中は去年来た時とはあまり変わらないかんじだった。僕はコートを脱ぎ、部屋の隅っこにあった椅子

に掛けて、その椅子に座った。窓を見ると馬車や人が行きかうベーカー街が目に入る。ここが世界有数の大都市たるロンドンだからか、心なしかみんな忙しそうに見える。こんなだとくつろごうと思っても、なかなかくつろげない。

伯母が紅茶とビスケットを持ってきてくれた。

「なんで手紙もなしにここへきたの？」

開口一番、伯母は聞いてきた。僕は正直に話した。

「……ヘマを、したわけじゃないんだ。」

伯母はうなずいてくれた。

「でも、勤め先をクビにされちゃって……ほら、父さんも母さんも僕もういないから……。」

僕は泣きそうになった。そうだ。父さんは交通事故で、母は病気で死んでいる。だからこそ僕は伯母以外に頼る人がいなかったんだ。それにしても、この一年はほんとついていない。頭を抱え込んで、僕は言った。

「自分がどうなるのか、僕にはわからない。まるで、そうだな、なんか、インクよりも黒い何かが僕を包んで、連れ去ってしまいそうなんだ。」

言っている言葉は自分でも意味が分からなかった。そんな僕を見かねた伯母が、僕の頭をなでながらこう言った。

「二十年ちょっとしか生きてないのに、そんな人生諦めたようなこと言わないの。大丈夫よ、アンソニー。悪いことがあっても、すぐにいいことが巡ってくるから。」

この時の伯母の言葉は単なる励ましにしか聞こえず、にわかに信じがたかった。

Ｄａｒｋｅｓｔ　ｔｉｍｅ　②

その後何日か、伯母の家で過ごした。職をなかなか見つけられない自分に焦っていたが、伯母はそんなことも気にしない風で
「ゆっくりしていきなさい。」
と言ってくれるのだ。ありがたい。だが、いつまでも伯母に迷惑をかけてはいられない。僕の焦りが最高潮に達しそうになったある日、それは起きた。
伯母に世話になってから一週間後ぐらいのことだったか。その日は確か日曜日で、夕方に気晴らしに散歩にでも出かけようと思って伯母の家の近くにあった大きい公園（後で知ったのだが、リージェンツ・パークというらしい）に行ったのだった。
ただなんの目的もなく歩いていたら、後ろから自分の名前を呼ぶ声が聞こえた。
「アンソニー！アンソニー・ハドソン！」
振り返ってみると、旧友のダニエル・ステイプルトンが手を振っていた。僕は彼のもとへ走っていった。このロンドンという大がいくつついても足りないような都市で旧友に会うことなんか僕は予想だにしていなかったから、嬉しくて嬉しくてたまらなかった。
「久しぶりだなあダニエル！」
「やあ、アンソニー。元気そうで何よりだ。」
僕らは二人握手をし、肩を組み合った。
その後僕らはパブを探し出してそこで飲むことにした。
「乾杯！」
ウイスキーを飲みながら、僕は彼に今まで起こったことを簡潔に話した。ダニエルはなんとも言えない顔をして
「災難だったな。」
と言ってくれた。
「で、今職無しなわけか。」
「そうだよ。今手に持ってるのはわずかな退職金と紹介状だけだ。ほぼ一文無しさ。」

「そうか……。力になってやりたいけど……」
ダニエルは必死に考えていてくれたようだった。そして。
「そうだ、そういえば！」
あまりにも急だったからびっくりして、僕はむせてしまった。
「ゴホッゴホッ……ど、どうしたんだよ？」
「君の職だよ！」
「どんな？」
僕は彼の言葉に、一縷の期待をかけていた。
「俺のじいさんが、どこだったか忘れちまったけど、執事やってるんだ。前によこした手紙で人手不足だっつってて、もしかしたら今もそうかもしれないから、お前いけるんじゃねえの？」
僕は天にも昇るような喜びに包まれた。やはり、持つべきものは友だ。
「今すぐ教えてくれ。どこだそれ。」
僕はダニエルにこれでもかというほどに顔を近づけた。まるでキスでもしそうなくらいの間合いだった。
「わかった、わかった。」
ダニエルは苦笑して言った。
「俺がじいさんに手紙書いといてやるから、一週間くらい待っててくれ。」
そんなやり取りをして、僕らはパブを出た。遅く帰ってしまったから伯母がすごい心配していた。

Ｄａｒｋｅｓｔ　ｔｉｍｅ　③

翌日、僕は急に不安感に襲われた。いろいろな意味で、「覚めて」いたのだ。もちろん目も「覚めた」し昨日飲んだ酒が抜けて酔いが「覚めた」というのもある。そのせいで、高揚していた気分もめっきり「冷めて」しまった。よくよく考えたら、彼は励ましの一環で（酔っていたならなおさら）嘘を言ったんじゃないか。十分に、ありえる。ダニエルは陽気なやつで、お調子者で、うっかりで、昔からよく嘘を言うことがあった。そんな彼だからこそ、僕を元気づけるために、わざと……。

余計な事を考えることはよそうと思った。一週間と少し待てば、それが嘘か本当かは分かるのだから。そんな風に思いたかったけれども、心は全然落ち着かなかった。なんたって、命がかかっていると言っても過言じゃないもの。寝てもその事を思い、目を覚ましてもその事を思い、朝食を食べても、散歩に出ても、その事を思っていた。それこそもう、恋人を思うように（誤解しないでくれ僕は仕事中毒者ではない）。そんな日々が五日続いて、ダニエルと僕が会った六日後に、ダニエルからの手紙が届いた。

手紙の文面は、こんな風だった。

あの後じいさんに手紙を書いて、お前が職を欲しがっていることも書いておいた。じいさんの屋敷はまだ人員不足なようで、喉から手が出るほどお前のような人を欲しているらしい。ぜひ来てほしいと書いてたよ。住所はここに書いておくから、紹介状を送っておいてほしいそうだ。そうしたら、うちのじいさんからなんかしら連絡がくるだろう。このお礼はしなくていい……と言いたいところだが、どっかのパブで黒ビールをおごってくれ。

僕はこの手紙を読み終わった瞬間、文字通り飛び上がった。やったあ！とものすごい声で叫んでいた。そのおかげで、後ろから見ていた（いつからいたんだ）伯母に苦笑いされる羽目になった。黒ビールの

件はさておき、その他はまさに、僕の希望通りだ。僕は紹介状とその屋敷での職を望んでいる旨を書いた手紙を同封し、手紙に書いてあった住所を宛先に書き、その足で、その手紙を出しに行った。

これの返事を待つのにまた三日ほどかかり、ダニエルからの手紙をもらった四日後に屋敷からの返事が届いた。きれいな字で書いてあって、サインは、「ランズワース・ハウス執事・ジョージ・ハーバート・ステイプルトン」とあった。この人がおそらく、ダニエルのおじいさんなのだろう。読んでみると、どうやら面接をするらしい。その屋敷の主人がわざわざ出てきてくれるそうだ。なかなかすごいことだ。ありがたい。日にちは一週間後の三月六日だった。僕はいろいろと、準備を始めた。

お屋敷からの返事をもらった一週間後、僕は伯母、ダニエルと一緒にセント・パンクラス駅のプラットホームに立っていた。思えば、何週間か前にロンドンに来た時もこの駅を使ったんだった。人生とは不思議なものだ。

「忘れ物はない？」

伯母は言った。

「大丈夫だよ。出てくる前にあれほど確認したんだ。」

「そう。頑張ってらっしゃい。」

伯母は僕の頬にキスをしてくれた。それからダニエルは僕の肩をポンと叩き、

「頑張って来いよ。応援してるからな。」

とにこにこ笑いながら言った。

「ありがとう。二人とも、手紙は送るから。」

他になんか気の利いたことを言おうと思ったが、こういう時に限って言葉が全然出てこない。それは僕だけでなく、伯母、ダニエルも同じようだった。

「そろそろ、乗るよ。」

「おう。またな。」

「達者でね。」

僕は汽車に乗った。窓を見ると、手を振っている二人が見えたか

ら、僕も二人に向かって手を振った。二分くらいたったころだろうか。汽車が汽笛とともに走り出した。ホームの景色がだんだんと横へスライドしていく。伯母とダニエルはまだ手を振っていた。無論僕も振っていた。僕も二人も、互いが見えなくなってしまうまで、手を振っていた。

とうとう二人の姿が見えなくなると僕はなんだか、悲しくなった。

Ｄｒｅａｍｅｒ　①

汽車に乗って、二時間くらいしただろうか。目的地の最寄りの駅についた。駅からの道順は、手紙に同封されていた地図に書いてあったので、迷うことはなかった。というか、一つの道を曲がらずそのまま進めばよかったから、迷えという方が難しいのだけども。

駅前の市街地を抜けると、うっそうとした森に入った。森とは言っても道は続いていて、馬車一台が通れるような幅はあるようだ。出口も、森に入った瞬間から見えるくらいの、短い道である。

森を出ると、低い丈の草の生える草原に出て、そこに、お屋敷が見えた。石造りの三階建てで、大きすぎることもなければ小さすぎることもないような建物だ。角に一つの塔があって、それは聖堂を思い起こさせるようなただ住まいであった。僕はお屋敷の入口を探した。すると、入り口と思わしきところに、背の高い、年配の紳士が立っていた。その人は僕を見てにこりと笑って、

「アンソニー・ハドソンさんでございますか。」

と聞いた。僕は、

「はい。」

と答えた。

「私は、このお屋敷の執事を務めさせていただいている、ジョン・ステイプルトンと申します。」

これがダニエルの祖父か、と思った。言われてみるとどこかそんな面影がある。にこりと笑った顔なんか、ダニエルとそっくりだ。ステイプルトンさんはドアを開けて、

「では、こちらへ。」

とお屋敷の中へ通してくれた。

お屋敷の中は、普通という感じだった。前に勤めていたお屋敷となんら変わりはしない風だ。数秒歩いて、僕はある部屋に通された。ベッドが一台、そして書き物をするのにちょうどいいくらいの小さい机と、普通の椅子が二つあった。あと、鏡があった。ステイプルトンさんは

「少々お待ちください。」
と言って出ていった。座ってもいいと言われないまま椅子に座って待っているのもなんだったのでそのまま立って待っていた。
二分くらいは待っただろうか。ドアがキイという音を立てて開いた。そこに入ってきたのは……。
黒いつややかな髪を長くおろし、透き通るように白い肌をした人だった。
冗談じゃない。これじゃあ、女性が、それもなかなかの美人が、そのままスーツを着たようなものだ。馬鹿にしている。僕ははめられたのだろうか？僕は相当困惑した。その人は軽くお辞儀をして、こう言った。
「驚いているようだね。まあ、無理もない。」
本当にこの人が、このお屋敷の主人なのだろうか？
「まるで、本当にこの人がこの屋敷の主人なのかと言っているようだ。」
悟られた。
「まあいいさ。では、ちょっと時間を取らせてもらうよ。」
その人は急に僕の方に歩いてきて、僕の頭に触れ、パチンを指を鳴らした。
視界が黒に染まった。

Ｄｒｅａｍｅｒ　②

気づくと、僕はもやのかかった空間に立っていた。立っているといっても、どうも地に足をついたような心地がしない。浮いているわけでもない。確かに重力は働いている感じはするのに。

遠くに人影が見える。だけれども、もやのせいで姿がきっちりと見られない。その人影は、もやの中を歩きながら、キョロキョロといろいろなところを見回している。

その人影はだんだんと歩きながら僕の方に近づいてきていた。近づいてくるにつれ、だんだんとハッキリとその人が見えてきた。

例のスーツを着た女性だった。

その人は僕の方に向き直ってパチンと指を鳴らした。

＊＊＊

気づくと、僕は元の部屋にいた。椅子にも座っていた。結局のところ、僕は座って眠ってしまっていたのだった。目の前には例の人がもう一つの椅子に座って僕の方を見ていた。やばい。やらかした。主人（？）の目の前で眠ってしまっていたのだから。頭が真っ白になった。九割方落ちたな。そう思った。どうやってこのことについて弁解しようかと思って考えまくっていたところ、僕は例の人が笑ってこう言った。

「いいや、気にしなくてもいいさ。」

気にしなくてもいい？それはそれでありがたい。寛容な人で良かった。

「なにせ私が君の夢を見るためにやったことなのだからね。君は別にそんな風に気に病むこともないのさ。」

……この人は今なんと言ったのだ？

「まあいい。とりあえず確認するが、」

「ちょっと待ってください。」

僕はその人の言葉を遮るようにして、言ってしまった。頭の中はクエスチョンマークでいっぱいだった。お屋敷の主人がスーツを着た女性？「君の夢を見るため」？何もかもが分からない。そのせいで、言

葉が詰まる。例の人は大きい目をぱちくりさせていた。そして、思い出したかのようにしてこう言った。
「あ、ああ。自己紹介がまだだったね。」
そして例の人は姿勢を正して、コホンと咳払いをした。
「私は、エドワード・ミカエル・グラストン。第七代ランズワース伯爵で、この屋敷、通称『ランズワース・ハウス』の主人(あるじ)だ。君は、アンソニー・ハドソン、で間違いないね？」
「は、はい。」
「災難だったね。前の雇い主のことは。」
とりあえず、最大のピンチは切り抜けたようだった。僕はほっと心の中で一息ついて、こう言った。
「ああ、ステイプルトンさんから聞いていらっしゃるのですね。」
僕はそう思っていた。でもその人、サー・エドワードは言ったのだ。
「違う。君の夢を見て知ったんだ。」
いよいよもって分からない。
「ど、どういうことでしょう？」
僕は驚き戸惑って、聞いた。

Ｄｒｅａｍｅｒ　③

数秒の間があった。
「夢というのは、記憶とほぼ同じさ。記憶をベースとして、夢は作られる。」
と、サー・エドワードは言った。
「はあ。では、僕の記憶を、僕が眠ってる間に見た夢を通して見たということでしょうか？」
「まあざっくり言うとその通りだ。物分かりが良くて助かるよ。」
サー・エドワードはにこりと笑ってうなずいた。信じられない。というか、信じろと言う方が無理な話だ。他人の夢を通して記憶を見るなんて。そんなこと、人間にはできっこないはずだ。僕は、聞いた。
「あなたには、それが、できるのですか？」
と。それで、サー・エドワードはまたうなずき、
「できるとも。」
と。そして、付け足すように、
「まあ、信じられないだろうがね。」
と言った。信じられないに決まってますと言いそうになるのを必死に抑えながら、僕は黙っていた。すると、サー・エドワードは口を開いた。
「じゃあ、本題に入るとしよう。」
一呼吸置いて、続けた。
「君は一つ勘違いをしている。」
……急にどうしたのだろう。勘違いとはどういうことだろうか。やっぱりここが来るべきお屋敷ではないとか、全てジョークだとか、そんなくだらないことなのだろうか。
「なんでしょう。」
僕は素直に聞いた。
「うん。私は笑いそうになっちゃったんだけどね、ここに下僕の職はないよ。」
自分の耳を疑った。「ここに下僕の職はない」だと？じゃあどうし

てここまで僕は来たのか？全てはウソだったのか？僕はこの瞬間、ダニエルを心の底から恨んでいた。
「は？」
　僕はそれしか言えなかった。
「うちのステイプルトンの勘違いが君を混乱させる羽目になってしまったのさ。屋敷を代表してお詫びしよう。申し訳ない。」
　もうなにがなんだかわからない。とりあえず、僕は、
「どういうことでしょう？」
　と聞いた。
「つまりだね。君の親友であり、我が屋敷の執事であるステイプルトンの孫のダニエル・ステイプルトンが、君にこの屋敷の職を紹介する時に、どの職が募集されているのかをきちんと確かめなかったということが始まりだ。私が募集していたのは私の従者であり、屋敷の下僕ではない。むしろ、これ以上雇えないくらいに下僕は十分だ。」
　僕の目の前は真っ暗になった。
「ただ、君のステイプルトンから受け取った手紙にも、募集しているのは従者だと書かれてなかったようなのだから、さっき言ったように、非はこちらにもある。」
　僕は困惑しっぱなしで、なにを言えばいいのかわからない。でも、お屋敷から来た手紙には、どんな職に就くかは、よくよく考えると書いてなかったような気もしないでもない。
「ところで、君には二つの選択肢がある。」
　サー・エドワードは立ち上がった。僕の方に歩いてきながら、言った。
「一つは全て忘れて他で下僕の職を探す。もう一つはここで従者としての仕事をもらうか。さあ、どちらを選ぶ？」
　もう露頭に迷うのはたくさんだった。でも不安もある。従者なんてやったことのない仕事だ。僕に勤め上げることができるんだろうか？失敗もするんじゃないんだろうか？まず、主人となる人物がヘンテコすぎやしないか？でも、やっぱりここでの職を得るチャンスを逃したくはなかった。だから、僕は。

「……ここで、従者として、勤め上げさせていただきます！」
サー・エドワードはいかにも満足げな表情を浮かべた。
「うん。よく言った！なら、決まりだね。まあ、私の従者は大変だろうけど。」
サー・エドワードは苦笑いしながらそう言い、椅子から立ち上がり、部屋のドアへ向かっていった。
「追って連絡しよう。」
ドアを開けながらそう言ったサー・エドワードに、僕はある一つの質問をしようと思った。
「一つよろしいでしょうか？」
サー・エドワードは振り返って、
「なんだろう？」
と言った。僕はこんな質問をした。
「ステイプルトンさんがそのミスについてエドワード様に報告したのでしょうか？」
そうとしか考えられないのに。そうであって欲しかった。けれども、サー・エドワードは、
「違う。言っただろう？私は君の記憶を見たんだ。」
と言ったのだった。いたずらっ子のような笑みが、サー・エドワードの顔に浮かんでいた。

Welcome to 〝The House〟①

3．Welcome to 〝The House〟

あの「面接試験」が奇妙すぎたために、そのあとのその日の出来事は、あまり覚えていない。覚えていとというのも無理な話だろう？しかしそのあとはステイプルトンさんに部屋に案内してもらって、僕は明日から本格的に働き始めることになると言っていたことは覚えている。

ベッドに入りながら、僕はあの奇妙な「面接試験」についていろいろと考えていた。

あの人の言っていたことは一体何だったのだろう。

黒髪の美人。それなのに「伯爵」。その人が語ったこと。「夢」を「観る」。そこから「記憶」を引き出す。僕の頭では考えられないことばかりだった。だが、最近の目標であった職を得ることは達成されたのだ。だから、深く考えないで、ぐっすり寝た。

夢を見た。

僕は子供の頃に戻っているようだった。誰かの膝の上に座って、その人の話を聴いていた。

「……アーサー王は、今もこのブリテンをアヴァロンから見守っているのよ。」

老いた女性の声。そう語った声はなんとも言えない懐かしさを帯びていた。けれどもどうも誰の声だったかは思い出せないのだ。でも、僕がどんな話を聴いていたかはわかった。ー彼女が語るのはイギリス人ならば知らぬものはいない、騎士道精神とロマンチズムに彩られた、『アーサー王物語』である。

「マーリンはいまもいきてるの？」

僕は聞いた。

「どうだろうねえ……」

彼女は首を傾げた。だがすぐに思い出したような顔をして、

「本物のマーリンはどうだかわからないけれど、」

と話を切り出した。
「もしかしたら、伝説に記されなかった隠し子がいたりして、今もその子供たちがいるのかもしれないねえ。」

目が覚めた。僕は起きた直後に頭を片手で掻くクセがある。今朝も例外ではなく、頭を掻きむしる。すると、僕は今さっきまで見ていた夢のことを思い出した。あの声は祖母の声だ。そういえば、僕が小さい時、よくいろんな物語を聞かせてもらっていた。『アーサー王物語』もその一つである。

それよりも、僕の心に引っ付いたのは「マーリン」という言葉である。マーリンは夢魔と人間の混血である魔術師である。ユーサー、アーサー両王に仕え、数多の予言を残した。夢魔の血が入っているから、人の夢を観たり、人の夢に侵入したり出来たのだろうか。

そして、サー・エドワードはなんと言っていたか。
「君の夢を観た。」

そんなことを言っていた。夢の中でマーリンという言葉が出てきたのは偶然なのだろうか。サー・エドワードとマーリンと。何かつながりがあるのだろうか。そんなことを考えながら、着替えた。

Welcome to "The House"

②

着替えを済ませて窓を眺めていると、ドアをノックする音が聞こえた。僕はどうぞと言って、その人を招き入れた。ステイプルトンさんだ。

「おはよう。ハドソン君。こっちだ。ついてきてくれるかい？」

手をこまねいてそう言った。そのまま歩いていったので、僕はついていく。案内されてついたのは、使用人の食堂であった。人々はみんなワイワイガヤガヤしゃべっている。でも、ステイプルトンさんが食堂に入り、一つ咳払いをすると、みんながしゃべるのをやめ、食堂は静まり返る。

「ご協力、ありがとう。」

ステイプルトンさんが言う。

「今日から旦那様の従者として仕えることとなった、アンソニー・ハドソン君だ。」

僕も

「アンソニー・ハドソンです。よろしくお願いします。」

と言って、お辞儀をした。ステイプルトンさんは僕の方へ向き直った。

「わからないことがあったなら、ここにいる屋敷の使用人に、もちろん私にも、気軽に聞きたまえよ。ここにいる使用人たちは、同じ屋敷、同じ主に仕える仲間なのだからね。だから、」

今度は使用人たちの方を向いた。

「ハドソンさんが困っていたら、助けてあげるように。なんせ、来てから日が浅いからね。」

使用人は皆はいと返事をした。しかし、返事の仕方はさまざまだった。普通に元気に返事をする人もいたし（こっちが大多数なんだけれども）、ふてぶてしく返事をしているような人もいた。どうやら、僕は使用人全員から歓迎されているわけではないらしい。まあ予想はし

ていたけれど。
「では、諸君。私からの話は以上だ。食事中に時間を取らせて悪かった。もう食事に戻ってもらっても構わないぞ。」
ステイプルトンさんのその一言で、皆は堰を切ったようにお喋りと食事を再開した。
「ゴドフリー！」
ステイプルトンさんが呼んだのは、空席の向かいに座る使用人だった。
「なんでしょうステイプルトンさん。」
「向かいの空席を君の隣に移動させてくれないか？」
「わかりました。」
ゴドフリーといったその使用人は、向かいにあった椅子を彼の隣に持ってきてくれた。
「あそこが君の席だ。座りたまえ。」
「はい。」
僕はその椅子の方へ歩いて行った。歩いていく間に、何人かが内緒話をするのが聞こえた。僕を悪く言う言葉はあまり聞こえなかったが、一つだけ、
「青二才だ。」
という言葉が聞き取れた。無理もない。だって、どう考えても二十代前半で従者は若すぎる。想定は、していたことだ。
椅子に座ると、料理が机の上に置かれた。置いてくれたのは、おそらく厨房に勤めているだろう女性だった。ぶっちゃけて言うと、太ったおばさんだった。
「ありがとう、あなたは……。」
僕がそう聞くと、彼女はにこやかに笑ってこう答えた。
「マリア・エリンって言うよ。ミセス・エリンと呼んどくれ。ようこそ、ランズワース・ハウスへ。」
そう言ってそそくさと厨房へ戻って行った。
「料理が冷めちまいますよ。」
今度は隣から声が聞こえた。振り替えると、さっきのゴドフリーが

話しかけていた。
「え？」
「いや、料理が冷めちまうって、ほら。ミセス・エリンは自分の料理をコケにされんのがこの世の何よりも嫌いなんですよ。朝食が豆粒一個だけになりたくなきゃ、早く食うことですね。」
　驚いた。
「豆粒一個って……前そんなことがあったのか？」
「ええ。あそこの、斜め前にいる、リーヴズってやつが前に料理を食わずにメイドたちと喋ってたんです。その時のミセス・エリンの剣幕ときたら……まるで火山が目の前で噴火しているようなくらいに思えましたよ。そんで、次の日の朝食は豆粒一個。メイドたちはちゃんと食べていたので処罰を免れたんですが……ホントですよ、これ。」
「そうか、じゃあ気をつけなくちゃいけないな。君は、ゴドフリー、だよね？」
「はい。ゴドフリー・ウェッブです。この屋敷で下僕をさせてもらってます。よろしく。」
　それから、ゴドフリーは周りを見回して小さな声で僕に話しかけた。
「さっき、リーヴズってやつのこと、話したでしょ。あいつには注意しといてください。あんまりあなたのことを快く思っていないようだ。あいつから何度も嫌がらせを受けるかもしれない。忠告しときます。まあ、なんかあったら、僕に行ってください。相談には乗りますよ。」
　僕は、「ああ。」とだけ言った。ゴドフリーは自分の食器を返しにいった。
　ふと、見回してみると、やっぱり賑やかだ。前のお屋敷では、食事は皆静かにやっていた。僕はそれには一切の不満をもらさなかったけれど、やっぱり寂しかった。
　そう思うと、今まで憎くて憎くてたまらなかった前の主人は、楽しい職場に変わる機会を与えてくれたという意味では、破産寸前に陥ってくれて良かったのかも知れない。
　そんなふうに物思いにふけっていると、自分の手が全然スプーンを

動かしていないことに気づいた。流石に朝食豆粒一個は懲り懲りである。

急いで食べ終えて、食器を厨房にもどした。気づいてみると、さっきまで賑やかだった食堂が、ウソみたいに静まっていることに気づいた。不思議に思って、食堂に戻ってみると、みんなやけにかしこまっている。見回してみると、どうして皆がそんななのかが、わかった。

サー・エドワードがその目で僕を捉え、微笑した。